

2012年4月8日 イースター礼拝メッセージ

聖書箇所：ヨハネの福音書 20章 11～18節

説教題：なぜ泣いているのですか

1 もし復活がないのなら

今朝は、主の復活を覚えるイースターの礼拝となっています。

ある方はこんなことを言います。「十字架で殺された人が三日目によみがえったなどという話しは、キリスト教を広めようと思った弟子たちが後から考え出した作り話だ。」もし本当に作り話であるなら、私たちは中身の無い張りぼてのようなものを信じていることになります。

ではパウロはどうだったか。彼は物事を理詰めで考えるタイプの人です。そのパウロが主の復活についてこんなことを述べています。「もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。」(第一コリント 15章 13, 14節)

私たちはキリストを信じていると言っていますが、いったい何を信じているのか。突き詰めていけば、主が復活されるところに行き着きます。今朝はマグダラのマリヤの目を通して、主のよみがえりについて考えていきます。

2 からっぽの墓

(1) 「主のからだ盗まれた」

マグダラのマリヤは、かつて悪霊につかれ、いろいろな病気に苦しんでいたときにイエスにいやしていただいたことから、それ以来

イエスの弟子となったと考えられています。イエスが十字架で死なれたときも、そのなきがらを墓に葬るときも、マリヤはいつもそばにいて一部始終を見ていました。ですから、週の初めの日、つまり日曜日の朝ですが墓に来たときも、どの墓であるか間違えるはずはありません。

当時の墓は、山の斜面に横穴を掘り、そこに遺体を納めるようになっておりました。入り口は大きな石でふさぐ構造です。金曜日の夕方イエスのからだを納めたときも、墓石はきちんと墓穴をふさぐように置かれていたのを確認しております。ところが、今来てみると墓石は取りのけられていて、イエスのからだはそこにありません。マリヤはてっきり誰かがいやがらせをして盗んでいったに違いないと考えました。

(2) 泣きながら墓をのぞき込む

自分が信じ、頼りにしてきたイエスが十字架で殺されたことだけでも耐え難い悲しみです。そんな悲しみに追い打ちをかけるように、イエスのなきがらがどこかに消えてしまいました。

その時のマリヤの様子が11節にあります。「マリヤは外で墓のところにとたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。」

ひよっとしたらイエスのなきがらがそこにあるかもしれない。無駄だと知っていながら、どうしてもあきらめきれません。

なぜ無駄だとわかっていながら、墓の中をのぞき込むのでしょうか。墓の中に何を見つけようとしたのでしょうか。ひとこと言えば、それは「希望」ということではないでしょうか。私の人生のすべてであったイエスは死んでしまいました。それはどうしたって取り戻すことはできない。だったらせめてわずかでもいいから墓の中に希望がありはしないか。マリヤはそんな思いで墓の中をのぞき込みました。

マリヤがしたこと、よく考えれば、私たちがかつてやっていたこと、あるいは世の人たちがやっていることそのままです。お彼岸やお盆になれば、多くの人たちはお墓にお参りに出かけます。私の生まれた家では、お盆になれば普段は遠くに離れて住んでいる家族や親戚が集まり、正装してぞろぞろと墓参りに行くのが習わしでした。

お墓は自分の父や母が眠る場所です。血のつながった自分の兄弟が眠る場所。またある方には自分の妻や夫が眠る場所。中には自分の子供が眠っているという方もいるでしょう。お墓に行けば、どうしても愛する家族が死んでしまったことを思い出してしまいます。そんなつらいところに、普通なら行きたくありません。それなのにどうして人々は正装までしてお墓に行くのでしょうか。何かの希望を見つけようとしているのではないのでしょうか。悲しみを乗り越えて何とか前に進む力をもらいたい、そんな思いで人々はお墓の前で手を合わせているのではないか。

マリヤも、もしかして墓の中に希望があるかもしれない、そんな思いを棄てきれず、お墓をのぞき込みました。では、マリヤがこのとき考えていた希望とはなんであったのか。次に考えていきます。

(3) 主のからだを捜して

のぞき込んでみると、驚いたことに墓の中にはふたりの白い衣を着た見知らぬ人がすわっています。マリヤはそれが誰であるのかわかりません。次から次へと訳のわからないことが続き、頭が混乱しました。

墓の中に座っていたふたりはマリヤに、「なぜ泣いているのですか」と問いかけます。マリヤは答えます。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」

「私の主」とは、もちろんイエスのことです。それはすぐにわかります。でも、もう少し踏み込んで考えてみたいのです。では、マリヤが「私の主」と言ったとき、具体的には何を頭の中の思い描いていたのですか。マリヤは言っています。「どこに置いたのか、私にはわかりません。」このことばからわかるように、マリヤが「私の主」と言ったとき、具体的には「イエスのなきがら」を頭に思い描いています。マリヤは墓をのぞき込んで、イエスのなきがらを探し続けました。

マリヤがしたことは、私たちがしていることとまったく同じです。

少し前になりますが、「おくりびと」という映画がありました。あの映画で納棺師という職業が一躍有名になりました。最初は自分の職業がなかなか理解されず悩んでいた主人公が、次第に地域の人たちに受け入れられ、ときには感謝もされていく、そんな内容でした。

人々は、口では「死んだらもう終わり。土に帰るだけ。後には何も残らない」と言います。しかしよく見ると人間はそんなに単純に割り切れるものではない。納棺師という職業

が存在するほど、亡くなった方のなきがらを大切に扱おうとします。整えられたなきがらを見て、生き残った者たちはそこに何かの希望を見いだしたいと考えます。

マリヤも主のなきがらを捜し、そこに希望があるのではと考えました。

3 「なぜ泣いているのですか」

(1) 泣く必要はない

墓をのぞき込みながら泣きはらしているマリヤのうしろに、よみがえられたイエスが立ちます。マリヤは最初、てっきりその方は墓地を管理している管理人なのだろうと考えたようです。それなのに不思議なことです。イエスはマリヤに対してご自分が誰であるかをすぐには明かさずとほしません。そしてこう尋ねます。「なぜ泣いているのですか。誰を捜しているのですか。」

聖書を読んでいて、ときどきイエスのことばに戸惑うことがあります。ここもその箇所のひとつです。イエスはマリヤがなぜ泣いているのかわからなかったというのでしょうか。マリヤが誰を捜しているのかわからなかったというのでしょうか。そんなはずはない。全部知っておられる。知っていながら、知らない振りをして「なぜですか。誰をですか」ととぼけて尋ねる。意地悪な見方をするなら、悪ふざけをしているようにさえ見えます。そんなはずはない。イエスは大切なことに気がついてもらいたくて、このような表現をされたはずなんです。

二つのことがあります。

一つ目です。私たちは過去に愛する家族を亡くしたとき何度も泣いてきました。これからもそのたびに泣くでしょう。どんなことをしても愛する家族を取り戻すことができま

せん。生きている者の世界と、死んだ者が向かう世界との間に大きな壁があつて、それを乗り越えることができない。だから泣くしかない。

でもイエスにとってはどうなのでしょう。イエスは、十字架で死なれました。死んだ者たちが行くとされる黄泉にまで下りました。そのイエスがよみがえられました。私たちには絶対に乗り越えることができないとあきらめていた、あの大きな壁をこの方は乗り越えた。つまり、この方にとって死というものが存在しなくなったことになる。だから、死んだと言って泣く必要がない。

少し冷たい表現をすれば、死からよみがえられたイエスにとって、マリヤが泣いていることは実に不思議な光景なのです。泣く必要がないのに、えんえん泣いている。だから思わず尋ねたくなる。「なぜ泣いているのですか。」

もちろん、イエスはマリヤの心が理解できない冷たいお方ではありません。「今はもう、あなたは泣かなくてもよいのだから。」そんな優しい気持ちを込めて「なぜ泣いているのですか」と声をかけます。

(2) 真の希望があるところ

そして二つ目の意味です。イエスは続けます。「だれを捜しているのですか。」

マリヤは墓の中をのぞき込んで何を捜していたでしょう。先ほど触れました。イエスのなきがらでした。死んでしまった者のからだを捜していた。それに対し、イエスはなんと問いかけたか。「だれを捜しているのですか。」

どんな答えを期待した質問でしょう。「イエス・キリストを捜しています。」ですね。

でもマリヤが捜していたのはイエスのからだでした。この二つは似ているようだけれど、まったく違います。マリヤは間違っただけを捜していた。イエスのなきがらではない。イエスのなきがらには何の希望もない。では、本当の希望はどこにあるか。死からよみがえられ、生きておられるイエス・キリスト。この方にこそ本当の希望がある。その生きておられるイエスがマリヤの前に立っています。

あなたは今気がついていないけれど、実は目の前に立っている方の姿を見ている。ほんのちょっとだけ近づいてみなさい。そうすれば気がつくはず。あなたの希望はどこか遠くの手の届かないところにあるのではない。すぐ目の前の手の届くところに来てくださっている。この方は私たちに尋ねます。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」

私たちは、生きている間に何人もの愛する人たちを亡くし、そのたびに涙を流し、泣いてきました。死という現実を突きつけられ、どこに希望があるのかともがきました。

よみがえられた主こそ、私たちの真の希望であることを、今朝もう一度覚えたいと願います。